

戦前期の入江泰吉と光藝社

—— 「上田写真機店関係文書」と新発見史資料から ——

小川直人

要旨

本稿の目的は、大阪市立大学文学研究科COEプログラム・アーカイブプロジェクトが蒐集した「上田写真機店関係文書」と、個人蒐集の「新発見史資料」を用いて、〈大和路の作家〉として名高い入江泰吉の戦前期という、入江泰吉伝及び日本写真史の「空白」を些かなりとも明らかにすることである。初公開となる諸史資料を紹介しながら、本稿では主に入江泰吉の上田写真機店修行時代、写真材料商・光藝社の創業時代、アマチュア写真倶楽部・光藝倶楽部の運営時代という、入江の紀伝にとって枢要な三つの画期を叙述対象とした。

その結果、従来の研究史が典拠としてきた入江泰吉の自伝（重要な基本文献であるが）は、とりわけ上田写真機店時代に記憶違いが目立ち、入江研究や各種年譜の誤謬の温床となっていることが確認された。上田写真機店時代については、「上田写真機店関係文書」によって、入江の勤務状況とその周辺も僅かながら史料的に明らかとなった。また、従来は「年度」以外は不分明であった光藝社の創業時期や光藝倶楽部の結成時期が、「月」までは限定できるようになった。光藝社時代については、映画制作事業と大阪写真材料商組合加入との関係が検証され、「写真材料商入江泰吉」の姿が初めて確認された。光藝倶楽部時代については、月例会の運営状況や倶楽部メンバーの名前と作品の一端が明らかとなった。さらに、入江が光藝倶楽部での表現活動に留まらず、作風を共有する外部の写真研究会にも参加し、戦前期の大阪写壇で一定評価を得つつあったことが確認された。また本稿では、ほとんど残存が確認されていない光藝社時代の入江泰吉肖像写真と、戦災で焼失し詳細不明であった戦前期入江作品の「タイトル」の一端を明らかにした。

キーワード：上田写真機店、入江泰吉、光藝社、光藝倶楽部、大阪写真材料商組合

首記

——入江泰吉、「幻」の大阪時代——

倭は 国のまほろば たたなづく

青垣 山隠れる 倭しうるはし

——『古事記』

この国くにしのびのうた思歌が湛える重力に魂を吸寄せられた人々は、古今枚挙に暇がなかり。浪華写真倶楽部初期の巨匠・宗得蕪湖が好んだ主題は大

和路の風景であったし¹⁾、日本古代史の碩学直木孝次郎も、旧制高校時代の若き日より大和巡礼に蠱惑され、飛鳥園の小川晴暘が撮影した仏像写真を座右においた大和路鼯鼠であった²⁾。写真ジャーナリズムの領域でも、吉川速男『カメラの旅・奈良』、北尾鎌之助『聖蹟大和』など、早春・錦秋を問わず奈良の情景を取材した写真関係者は多い³⁾。とりわけ、奈良・大和路は、大正から昭和初期に写壇を席捲したピクトリアリズム (Pictorialism) の時代、アマチュア写

真家たちの写欲をそそる、興趣に富む風景であり続けてきた。しかし「斑鳩の里落陽」「二上山暮色」などの秀作で知られる入江泰吉（明治38年～平成4）ほど、「滅びの美学」への深甚な共感を通じて⁴⁾、この国思歌が湛える悠遠な大和路の心象風景を、典雅と憂愁の微妙なアマalgamにおいて表現しえた写真家はいない。

周知のように、このような〈大和路の作家〉としての入江の出発と名声は、戦後の出来事である。ところが、戦後の令名に論評が集まる一方、大阪で活躍した戦前入江については『入江泰吉自伝「大和路」に魅せられて』の回顧談があるのみで⁵⁾、日本写真史では本格的な関心が寄せられてはいない。最大の理由は、戦災が史資料を灰塵に帰したことである。

戦前、大阪時代のしるべは、永遠に喪われたかにみえた――。

1 入江泰吉研究史と「新発見史資料」

1.1 入江泰吉研究史のアポリア

入江泰吉論／研究のアポリアというべきであろうか、あらゆる入江泰吉論は基本的に足並みを揃えるが如く、大和路の写真作家として令名を馳せた戦後の活躍に照準が固定されている⁶⁾。入江の戦前については、最近の入江泰吉年譜や⁷⁾、いずれの各論稿も、『入江泰吉自伝「大和路」に魅せられて』で語られた回顧談に、全面的に依存するに留まるといっても過言ではない。この理由は、昭和20年（1945）3月14日の大阪空襲で大阪市南区鰻谷仲之町15番地の自宅兼店舗光藝社が全焼、ライカとローライフレックス、朝日新聞社主催の世界移動写真展で最高賞を得た昭和15年（1940）の「春の文楽」シリーズのネガフィルムだけが難を逃れ、それ以外の諸資料の一切を喪ったことにある⁸⁾。かくて入江の戦前期を、「入江泰吉関係文書」という一次史資料群から復原／検証する機会を喪われ、その決定的な史資料不足を代補する回顧談に頼らざるを得ない状況にあった。

『自伝』に口絵として掲載された、入江泰吉や光藝社の戦前期の写真は、奈良の入江の生家に保存されて戦災を免れたものである。もとよ

り、それは入江が撮影した戦前の「作品」ではないが、これらプライベート写真を含めて、残存が確認される戦前期の入江泰吉に関する写真資料は、「文楽」シリーズを除けば、数葉に留まるという⁹⁾。

大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター（UCRC）は、平成14年（2002）度採択21世紀COEプログラム「都市文化創造のための人文科学的研究」の一環として、戦前期大阪の写真材料商・上田貞治郎旧蔵の古写真を「上田貞治郎写真コレクション」としてデータベース化するデジタル・アーカイブス・プロジェクトを運営してきた¹⁰⁾。筆者も関わったその史資料調査過程で、偶然にも戦前期の入江泰吉に直接／間接に関わる史資料が新発見された。上田貞治郎が経営する上田写真機店が、青年時代の入江の勤務先であったことがその背景にある。上田家が保管する「上田写真機店関係文書」には、今回の第一次デジタル・アーカイブス事業に活用された古写真アルバムとは別途、複数の風景写真アルバムやプライベート・アルバム、関連文書が含まれている。新発見の入江泰吉の史資料もまた、次回以後のデジタル・アーカイブス化作業の対象に属するものである。上田貞治郎の略伝を含めた「上田写真機店関係文書」の全容についてはここで深く立入ることはせず、準備中の別稿に譲り、本稿では行論に関わりの深い史資料に限り、逐次、紹介することとする。

さて、本稿の目的は以下の二点である。第一は、「上田写真機店関係文書」中の入江泰吉に関する新発見史資料と、筆者が個人的に蒐集した新発見史資料を紹介しつつ、『自伝』のみに準拠してきた従来の「定説」を再検証し、事実関係の誤謬の指摘や敷衍・校訂を試みることである。第二は、新発見史資料に準拠して、『自伝』ではその詳細が不明瞭であった戦前期における入江泰吉の動向を、上田写真機店時代、写真材料商・光藝社の時代、光藝倶楽部の活動に照準を合わせ、初めて明らかにすることである。

1.2 新発見史資料

UCRCによる「上田貞治郎写真コレクション」デジタル・アーカイブス・プロジェクトと、筆者個人の史資料蒐集で得られた新発見史資料は、以下の通りである。

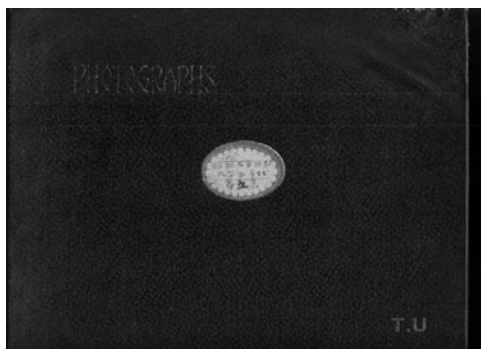
■A 「光藝社 入江泰吉氏」肖像写真

図1 「光藝社 入江泰吉氏」肖像写真



UCRCが「上田貞治郎写真コレクション」で主要対象としたのは、明治初年から昭和戦前期にかけての多岐にわたる大阪市内を中心とした全国風景写真である¹¹⁾。しかし上田家には「上田貞治郎写真コレクション」デジタル・アーカイブス未収の、貞治郎個人のプライベート・アルバムが数点残されていた。新発見の入江泰吉肖像写真(図1)は「昭和六年四月ヨリ八年五月まで 第五集」とペン書された赤枠の円形ラベルが貼付された黒皮製のプライベート・アルバム(図2)に糊付された形態で残されていた一葉である¹²⁾。

図2 「昭和六年四月ヨリ八年五月まで 第五集」



同写真の背面には、鉛筆による「光藝社 入江泰吉氏」の書込がある。貞治郎には定期的に写真を整理する習慣があり¹³⁾、几帳面にほぼ撮影年代順に写真がアルバムに貼付されていることから、入江泰吉肖像写真は、貞治郎のアルバムタイトル通り「昭和六年四月」以降、入江から貞治郎へ贈呈されたものと推察できる。同写真は、縦9.5cm、横4.4cmでほぼ名刺判写真の寸法に相当する。

■B 「上田貞治郎日記」(図3)

同日記(非公開)はUCRCのプロジェクトで発見された史料で、入江泰吉の上田写真機店在勤中(大正14年~昭和6年)の動向を窺知できる史料である。もっとも「上田貞治郎日記」において、入江個人について直接記述した記事は一箇所に留まり、多くは入江を含む上田写真機店員の動向が、「店員一同」等の表現で一括して抽象的に記載されることが殆どである。とはいえ同日記を『自伝』と比較吟味することで、上田写真機店在勤中に関する『自伝』の内容を敷衍できるだけでなく、『自伝』記事の誤謬や曖昧な部分を是正する作業も可能となる。昭和5年(1930)の「上田貞治郎日記」からは、従来知られていない入江の勤務実態の新事実が明らかになった。

図3 「上田貞治郎日記 明治四十四年」



■C 『大阪寫真材料商報』

昭和6年（1931）に上田写真機店を辞職し、大阪市南区鰻谷仲之町に独立開業した光藝社時代、写真材料商としての入江泰吉の動向を知ることができる史料である。『大阪寫真材料商報』は、上田貞治郎が第三代大阪写真材料商組合組長に在任中の大正13年（1924）5月5日、組合評議員会で創刊が決定した大阪写真材料商組合の機関紙である¹⁴。筆者が所蔵する同史料の綴三冊は、戦前に大阪市東区瓦町2丁目60番地で河原写真機店を営んでいた河原栄一旧蔵のもので¹⁵、残存部数は昭和2年（1927）7月号から昭和12年（1937）11月号に限られるが、昭和9年（1934）以降の同史料に光藝社・入江泰吉の写真材料商としての足跡が散見される。

■D 『大阪寫真新聞』

大阪写真材料商組合の第四代組長を務めた藤井藤治郎が大阪写真新聞社を設立し、写真界全般を網羅する「全日本高壁の機関紙」として昭和6年12月に創刊した月刊業界紙で、当初無料配布された模様だが¹⁶、昭和8年（1933）5月段階では1部10銭で頒布されていた¹⁷。写真材料商情報、写真技術論、アマチュア写壇や営業写真界の消息、イベント情報などが掲載された。現在確認されるのは3部に過ぎない。昭和11年（1936）5月1日号と昭和13年（1938）12月1日号の同紙「写壇消息」欄に、光藝倶楽部と入江泰吉の動向が摘記されており、入江の喪われた戦前期の作品のタイトルや、光藝倶楽部の月例会の実態が、史料的に明らかとなった。

いた¹⁸。大正年間、絵画の主題や構図を念頭に、繊細な感受性や心象風景を写真に具現化するピクトリアリズムが——ピグメント技法を駆使する愛友写真倶楽部や浪華写真倶楽部のような表現形式から、福原路草のように透明な叙情溢れる次世代のモダン・フォト的印象を湛えた表現形式まで、一様ではないが——、写壇を風靡していた¹⁹。単玉レンズの収差を利用することで、バルビソン派的な郷愁たどよう自然観照を具現する軟調描写が可能な「ヴェス単」は、ピクトリアリズム＝「芸術写真」の広範な流行と不可分の関係にあった。入江の愛機・ヴェス単が体现するピクトリアリズムの理念は、「写真をやりだしてから、絵具や溶油の臭いが頭から離れなかった」という入江の美学的嗜好と²⁰、相通じるものがあつたのかもしれない。

大正14年（1924）、入江は将来写真業界で生計を立てることを決し、まずは業界の実際を専門的に習得するべく、長兄の写友の紹介で南区安堂寺町4丁目の上田写真機店に入店した。上田写真機店について、従来の入江関係書は、「大阪のカメラ」「大阪のカメラ卸商店卸業上田写真機店」「大阪の写真機器卸商・上田商店」などと記載してきたが、いずれも正確ではない²¹。入江の入店当時の上田写真機店（明治34年9月1日創業）は既に輸入卸売と小売を兼ねる写真材料商で、大正11年11月1日に新築開業した安堂寺町4丁目の三階建洋館（新社屋）に輸入部兼卸部が、明治41年（1908）建築の順慶町4丁目の二階建て洋館（旧店舗）に小売担当の「市内小売部」＝「支店」が置かれていた²²。入江関係書が抱えるこうした事実関係の誤謬は、『自伝』に掲載された入江の記憶違いが、共通の温床となっている。

2 戦前期の入江泰吉

—上田写真機店から光藝社の頃—

2.1 上田写真機店時代

画家志望を諦念した入江は、大正11年（1922）頃からアマチュア写真倶楽部の「主宰者的な地位」にあつた長兄に譲渡されたイーストマン社製のヴェスト・ポケット・コダック（「ヴェス単」）を操り、撮影や引伸ばしに夢中になって

「次から次へと欧米や国内のメーカーから入荷する斬新なカメラや付属品、感光材料に目を見張った。荷解きの手伝いもしたが、かつて目にしたこともない珍しい機械に触れることができ、実に楽しかった。²³」

この回想から、入店当初の入江は安堂寺町4丁目の輸入部兼卸部に配属されたといえる。店主上田貞治郎の日記、大正15年（1926）8月1

日条に、「本日卸部小売部〔順慶町の「支店」のこと一筆者註〕共に棚卸品合」とある²⁴⁾。入江が回顧する「荷解きの手伝い」とは、上田写真機店のこうした日常業務の一端であった。入江の入店時、店員は14、5人で、全て年長者であったという²⁵⁾。昭和2、3年頃には、上田銀蔵、同信之助、同順三、同貞一、田中吉五郎、川西新次郎、本田文夫、坂口某、中野新一、松尾國蔵、轟多九磨などが入江の同僚として在職していた²⁶⁾。

『自伝』によれば、敬虔なクリスチヤンの店主上田貞治郎が、日曜毎に店員を強制的に教会へ連れだすことに、入江は「内心いやいや」で「閉口」していたという²⁷⁾。しかし大正15年の「上田貞治郎日記」を一覧してみても、貞治郎が店員を教会へ連れて行った記事は見出せない。むしろ1月14日「午後六時ヨリ小売店ニ於テ平出慶一先生ノ来会ヲ願ヒ店員一同ニ講演ヲ願ヒタリ」というように、教会仲間を上田写真機店に招聘し、入江を含む「店員一同」に聖書や基督教関連の講義を依頼する形式が実態であった²⁸⁾。この点もまた、入江の記憶違いであろう。

上田写真機店時代について、『自伝』にはもう一箇所、入江の記憶違いと察せられる箇所があり、入江研究や年譜の誤謬をもたらしている。入店二年後の動向についてである。

「こうしてまたたく間に二年が経った。かねて聞いていたとおり、この卸店では小売店を新設し、技術部を開き、写真芸術の研究のための会場を設けるなど斬新なシステムの新社屋が落成、私はその技術部門に配属された。²⁹⁾」

この入江の回顧談は、厳密な時間経過について曖昧であるが、「上田貞治郎日記」によれば、貞治郎が女婿の銀蔵や古参店員田中吉五郎に諮り、順慶町4丁目の「支店ヲ純小売店」とする組織改組を決定したのは、昭和3年(1928)1月2日のことである³⁰⁾。入江が回顧する「小売店を新設」とは、この組織改組以外において他にはない。従って、石井亜矢子編「入江泰吉 略年譜」が、上田写真機店の小売部技術部門「新設」と入江の配属を、昭和2年としたことは誤

りである³¹⁾。

また上記の『自伝』記事からは、小売部が俄かに「新設」されたように受取れるが、実はそうではない。既に確認したように、明治末期には上田写真機店は小売業務を扱っていた。そもそも「斬新なシステムの新社屋が落成」したのも、入江が『自伝』で回顧した入店後「二年が経った」時期ではない。「斬新なシステムの新社屋」は、既に入江が入店する以前、大正11年11月1日、安堂寺町4丁目に三階建の瀟洒な洋館として新築開店済みであった³²⁾。この新社屋を輸入兼卸部、順慶町の旧店舗を「市内小売部」として、役割分担が明確化されたのである。新築開店直後の11月10日には、洋館三階大広間で写真研究団体の光究倶楽部の例会が開催されており³³⁾、『自伝』がいう入江の入店後「二年が経った」時期に、初めて一連の「斬新なシステム」改革が実施されたわけではなかったのである。年譜の訂正が求められる。

上田写真機店は、入江の入店後ほぼ一年が過ぎた大正15年9月1日、資本金20万円で合名会社上田写真機店に改組しており³⁴⁾、異なる年代にまたがる複数の経営改革の記憶が入江のなかで混然一体となり、事実認識の混乱を招いていると思われる。

いずれにせよ昭和3年1月2日以降、入江は順慶町の小売部技術部門に転属した。同部門在職中の入江は、アマチュア写真倶楽部の世話役として「当時の肖像写真の大家結城真之介³⁵⁾」ら「審査員の先生を迎えたり、作品展示を手伝うのが仕事だった。³⁶⁾」写真作家として独立する宿志を斟酌すれば、小売部技術部門への異動は、入江にとって千載一遇の天佑であった。アマチュア写真倶楽部の討論や審査員講評の听闻を通じて、入江は写真印画の作法や技術論について「聴講生のつもりで」実地に学ぶ。やがて入江自身、作品の批評を仰ぐようになり、昭和2年5月8日に創立大会をみた全日本写真連盟の懸賞写真展に応募するまでになる。

「大阪郊外などに出かけては風景を撮った。自分が撮りたいものは風景写真だという方向は、この頃にはすでにはっきりしていたのである。³⁷⁾」

上田写真機店での研鑽の日々は、入江に写真作家としての矜持を芽生えさせていた。

入江が写真作家として覚醒し始めた頃、入江に寄せる店主貞治郎の信任も篤くなり始めていた。「上田貞治郎日記」を瞥見する限り、貞治郎は外回りの仕事は田中吉五郎や川西新次郎ら、信任の篤い古参店員に委ねるのが通例である³⁸⁾。昭和5年5月11日から18日迄、貞治郎が組長を務める大阪写真材料商組合の主催、大阪朝日新聞社後援の形式で、「初夏写真シーズン」を狙ったイベント「写真週間」が開催された³⁹⁾。その延長として、6月2日に写真材料廉売会も企画されていた。その準備と会場設営のため、6月1日、貞治郎が白羽の矢を立てたのは、入店六年目の入江であった。

「店員八田中入江等廉売会ノ為ニ朝日会館ニ出張ス⁴⁰⁾」

上田写真機店の商慣習を参酌すれば、番頭クラスの田中吉五郎と組み外回りの任務を与えられたことは、この時期の入江が、没个性的な「店員一同」という集合名詞に埋没する単なる一店員ではなくなりつつあったことを意味する。めぐる季節のなかで、入江は、厳格な貞治郎の眼鏡に適う有望な店員として着実に成長し始めていたといえよう。

上田写真機店時代、入江は休日や勤務後に、法善寺横丁や道頓堀で歌舞伎や映画などに興じ、道頓堀のライスカレー専門店でも舌鼓を打つ一方、信州や飛騨に撮影旅行をした⁴¹⁾。こうした個人的な余暇とは別に、上田写真機店や大阪写真材料商組合が主催する店員慰労会に、入江も参加していたと思われる。

大阪写真材料商組合が毎年実施する組合店員慰労会としては、大正15年3月23日に上田の店員16名が参加した比叡登山、昭和3年4月10日に店員15名が参加した琵琶湖周航、昭和5年4月22日の鞍馬登山などがあった⁴²⁾。また上田写真機店の行楽としては、大正15年10月24日の「店員一同二十三名京都へ遠足慰労会」、昭和3年8月12日には貞治郎を留守番に残し「店員一同堺ニ慰労会」、昭和5年7月13日には「店

員一同」で「天保山棧橋ヲ出発由良へ釣魚遊」などがあつた⁴³⁾。これらの催し全てに入江が参加したとは言い難いが、上田写真機店の行楽は、「店員一同」が参加していたことから、入江も同僚と親睦を深め行楽を謳歌したものと推察される。

2.2 鰻谷仲之町 光藝社

—大阪写真材料商組合の活動—

貞治郎の信任を得るくらいの実力を備え始めた矢先、昭和6年、入江は上田写真機店で知遇を得た顧客や写真倶楽部員の支援も得て⁴⁴⁾、大阪市南区鰻谷仲之町15番地に光藝社を独立開業した。従来、光藝社開業の正確な月日までは詳らではなかった。しかし新発見の「光藝社—入江泰吉氏」肖像写真が貼付されていた「昭和六年四月ヨリ昭和八年四月まで 第五集」アルバムが、重要な傍証を示唆している。同アルバムには、昭和6年4月14日、貞治郎の女婿上田銀蔵の葬儀で撮影された集合写真が貼付されている。だが「店員工場職人等」現役の上田写真機店関係者約30名が写しこまれた、その集合写真に入江の姿はみられないのである⁴⁵⁾。とすれば昭和6年4月段階で——この期日は、入江泰吉肖像写真が添付されたアルバム・タイトルの年代とも符合する——、入江は既に上田写真機店を辞し、光藝社を開業（準備）していたとも考えられるのである。

光藝社の営業内容は、店舗看板に掲げたように「寫真機材料 技術一般 小型映画制作」であった⁴⁶⁾。従来の入江論は『自伝』記事を踏襲し、光藝社の営業種目について開業当初から上記の内容であったと考えてきた。だが腑に落ちないのは、「寫真機材料」を営業種目に掲げながら、入江が開業から数年間、京阪神写真材料小売商同盟大阪支部（以下、同盟）や大阪写真材料商組合（以下、組合）に加入手続を済ませていないことである。

昭和6年9月1日施行の大阪写真材料商組合内規第四条は、「本組合ニ加入セサル寫真用品営業者ニハ卸売ヲ為スコトヲ得ス」と定め、違反者は取引停止や除名処分という、実質的に営

業不可能な苦境に追込まれる仕組となっていた⁴⁷⁾。とすれば、組合未加入の入江は、実質的に安定した写真材料の仕入れと販売が出来ないわけである。光藝社開業当初、入江は店頭看板にも拘らず、「写真機材料」を販売する写真材料商の仕事に主眼を置いていなかったのではなかろうか。

「自分の撮りたい作品を撮るのが目的ではあったが、生活をゆるがせにすることはできないから、若い人を二人雇って、写真機材も扱いDPEも引き受けることにした。⁴⁸⁾」

実際、『自伝』のこの告白からは「自分の撮りたい作品を撮るのが目的」で、写真機材販売は糊口の手段であるという、仕事に関する明確な序列関係が看取できる。昭和9年まで没入していた幾篇かの映画制作事業が、仕事の序列関係の最優位にあった。しかし精魂を傾けた映画制作の仕事が採算性の問題から泡沫と霧消した昭和9年、「目の醒めた」入江は「初心に返って写真に専念する。⁴⁹⁾」

光藝社にとって「昭和9年」という時期は重要な意味を孕んでいる。映画制作を断念した昭和9年は、入江が組合傘下の同盟に加入した昭和9年3月と時期的な重複関係にあるからである。従来、知られなかった入江の組合とのつながりが、新発見史料『大阪写真材料商報』(図4)の昭和9年4月号所載「小売商同盟大阪支部

図4 『大阪写真材料商報』綴



新加入 南区鰻谷仲之町十五番地 光藝社 入江泰吉」記事から明らかとなった⁵⁰⁾。

同盟加入により、光藝社は「写真機材料」の仕入や営業販売が正式に可能となった。その意味で、光藝社は、実質的に昭和9年3月以降から、看板に偽りない写真材料商として出立したといえる。昭和9年3月——映画制作の断念と写真材料商としての出立は、光藝社の経営指針上、表裏の関係にあったのだ。

それが、「初心に返って写真に専念する」入江の決意の内実である。

光藝社の経営状況については依然詳らかではない。入江夫人の光枝氏によれば、開業後しばらくはカメラをわずか4、5台ほど店頭に並べた程度であったという⁵¹⁾。昭和9年7月31日、光藝社はカメラの盗難広告を出している。

「一、品名 ゴルツ テナックス カメラ
アトム型旧式ダゴールF6・8付 カメラ番号
レンズ番号共に不明 取枠 バックホルダー
なし シャッター二五〇分之一 不良 ピント
枠は観音開き式 一、日時 七月三十一日午後
一時頃 一、推定犯人 三十歳前後の洋服の
男 一、通知先 大阪市南区鰻谷仲之町十五
光藝社⁵²⁾」

『大阪写真材料商報』の「盗難通知 大阪之部」欄に掲載された同記事は、光藝社が扱った商品の一端を示唆していると思われる。

昭和10年(1935)4月18日、心齋橋ビルディングにおける組合月例委員会で、「同盟員入江泰吉氏加入壹ヵ年経過に付組合員に推薦」され、「異議なく決定」をみた。入江が推薦された組合は上田写真機店ら有力卸売商が主導し、同盟の上部組織として廉売による過当競争を防止するため写真材料の組合協定価格の設定、一定以上の業者増加防止、アウトサイダー取引規制などで加盟員の利害の安定を図るカルテル組織である⁵³⁾。

同盟と組合における入江の活動は、三種類に分けられる。第一に、定期的な同盟／組合総会への参加。第二に、同盟／組合員が各々担当する各種委員などの組合公職活動。第三に組合主催の各種キャンペーンやイベントへの参加であ

る。

第一の活動について、入江は比較的消極的であった。昭和9年12月14日、南区東清水町北村本店で、入江の加入後最初の同盟定時総会が開催されたが、入江は欠席し委任状さえ提出していない⁵⁴⁾。昭和10年12月18日、日本橋のブラジル会館で開催された同盟定期総会は委任状提出で欠席、昭和11年11月24日、中之島の大阪ビルディングでの組合総会は「欠席に付多数決に賛同」を書面で通告している⁵⁵⁾。同盟に加入した昭和9年3月から史料が残存する昭和12年7月まで、入江の出席は僅かに昭和12年1月25日、東区備後町の大阪綿業会館における組合昭和12年度定時総会のみであった。

第二の組合公職活動として、入江は「方面区域分割方面委員」を務めている。昭和10年2月20日、心斎橋ビルディングにおける同盟二月委員会で、組合常任幹事藤井藤治郎提出の「方面区域方面委員制度」案が可決された⁵⁶⁾。同制度は「近接同盟員の親睦」と「統制機能の穩健なる発達」を目的に、府下を十三区域に分割し、区域毎に月例会を催し、同盟員相互の協定違反調査と組合／同盟への新規加入の勧誘を行う、相互監督的の制度である。

入江は上田写真機店出身の轟多九麿、上田松次郎、上田信之助らと同じ「南船場島之内方面」に配属された。同年7月10日の南船場島之内方面部会では、野木金蔵の営業地域移転の可否が「全部員」に諮問されており⁵⁷⁾、入江も部会諮問に回答したと推察される。その後、昭和10年12月18日、入江が欠席した同盟定期総会で方面制度再編がなされ、入江は大阿見清一を方面部長とする新設の「島之内方面」部会に配属された⁵⁸⁾。

方面委員部会を通じて、入江は上田写真機店時代の先輩や同僚と仕事をする機会を得たが、上田出身者と旧交を温め、日常的に交際することに熱心ではなかったようである。昭和6年4月の上田写真機店支配人・上田銀蔵葬儀に際して、大正年間の一時期に社員であったハナヤ勘兵衛（桑田和雄）は芦屋から駆けつけたが⁵⁹⁾、既述の如く上田関係者の集合写真に入江の姿は見出せない。また、昭和11年の上田貞治郎の喜寿祝宴についても、田中吉五郎、轟多九麿、松

尾國蔵ら旧社員の参加が見られるが、「喜寿祝宴来臨芳名控」に入江の名前は見出せない⁶⁰⁾。入江にとって光藝社の開業は、大店上田の威光や人脈に依存しない独立自尊の模索、上田写真機店からの「訣別」を意味していたのであろうか。

第三の組合主催キャンペーンへの参加に関する新史料は、『自伝』でも幾許かの悔恨を込めて語られている入江の戦争協力について、若干の再考を促すものである。昭和12年9月、総力戦完遂のために挙国一致の世論の創出を企てる宣伝機構の内閣情報部が発足した⁶¹⁾。入江は、その国策宣伝グラフ誌『寫真週報』に、昭和13年から職を得たことを、「軍国主義による侵略戦争推進のお先棒を担ぐこと」であったと自己批判している⁶²⁾。「生活の糧を得る方法」とはいえ、入江自身認めるように、それは紛れもなくファシズムへの献身であった。だが他方で——知られていないことだが——、盧溝橋事件の勃発で国内が戦争ムードに沸始めた昭和12年7月段階において、入江がその熱病的な風潮に安易な雷同をみせなかったことも、また指摘されるべきである。

昭和12年7月28日、大阪朝日新聞主催の軍用機献納運動に組合は協力を決め、募金運動を全組合員240数名に呼びかけた。桑田商会や上田写真機店等の大店を始め、組合員の過半からの応募があり、組合側も「大阪寫真材料界の義挙大阪朝日新聞社発表の軍用機献納資金募集運動に参加」と軍国主義ムードを煽った。しかし、〈バスに乗り遅れるな〉的なナショナリズムの安売りを求める組合の方針について、入江が応諾することは、——遂になかったのである⁶³⁾。

2.3 光藝倶楽部と入江泰吉

入江が上田写真機店に入店した大正末期から昭和初年は、関東大震災後に出現した近代都市／モダニズムの新奇な社会環境に触発されて、写壇が急旋回していく転形期にあたる。明治30年代以降、自然主義派からモダン・フォト的な潮流まで表現上の振幅を孕みつつ、写壇主流に君臨してきた旧来のピクチャレスクな「芸

術写真」の正統性は、俄かに動揺をきたし始めた⁶⁴⁾。

かわって写壇の寵児となったのは、バウハウスを拠点とするモホリ・ナジらのニュー・ヴィジョンや、レンガー・パッチュらの新即物主義 (Neue sachlichkeit) を奉じるノイエ・フォトグラフィーである。「新興写真」と邦訳されたこの新しい写真論は、フォトモンタージュやクローズアップによるリアルフォト等の多彩な手法を駆使し、しかもカメラ本来の「機械の眼」即ち「^{フォト・アウゲ}寫真眼」の客観性に全幅の信頼を寄せ、モダン都市を象徴する被写体のフォルムや幾何学的な構成美の表現可能性を錬磨していく⁶⁵⁾。関西写壇では芦屋カメラ倶楽部、丹平写真倶楽部、浪華写真倶楽部が、新興写真の旗手であった。

しかし上田写真機店時代から、既に「風景写真」作家としての自画像を築きつつあった入江は、それらとは異なる写真観を堅持した。

「このころ、関西新興写真が盛んになり始めたんですが、傾向としてはやはりサロニズムの方が強かったと思うんですね。私自身も奈良で育ち、水彩画や写真を撮っていた長兄の影響も多分にあって、どちらかというサロニズムの傾向が強かった。風景写真に傾倒してましたからね。⁶⁶⁾

入江は写壇の変貌を膚で感じとりながらも、「従来どおりのオーソドックスで情緒豊かな風景写真」、つまり何ほどこ従来の「芸術写真」の賦彩を湛えた「行き方に共鳴していた」のである⁶⁷⁾。従って、同時代の前衛を自負する丹平写真倶楽部などからすれば、戦前に入江のスタンスは「あきたらない」ものに映じた模様である。丹平写真倶楽部の若宮武二は言う。

「入江泰吉さんはグループが違っていました。どちらかというサロニズムの中で活躍していましたから…。新興写真は、サロニズムにあきたらなかった人たちによって、その対極として生まれてきた⁶⁸⁾〔後略〕」

「サロニズム」とは、斯界の前衛を自負する

新興写真が——西洋美術史において、非主流派の印象派が、アカデミーと密着した「官展」という既成の「正統」に叛旗を翻したように⁶⁹⁾——、既成の権威として君臨する伝統的な「芸術写真」を奉じる写壇の諸制度に対して、ジャンルとしての一線を画するラベリングとして用いた語彙である⁷⁰⁾。

それでは、伝統的な「サロニズム」写壇で風景写真を求道する入江を主宰に、昭和11年、光藝社の顧客の要望で結成されたアマチュア写真倶楽部・光藝倶楽部はどのような会員を擁し、どのように運営されたのか。以下、新発見史料『大阪寫真新聞』(図5)を通じて、その一端を明らかにする。

光藝倶楽部の名称が、現存する史料上最初に登場するのは、昭和11年3月22日に日本橋倶楽部で開催された関西印画相撲協会第一回相撲大

図5 『大阪寫真新聞』昭和11年5月1日号



会である。

「参加は浪華光影倶楽部、光藝倶楽部、ツタヤ寫真倶楽部、黎明倶楽部、地壇社寫友倶楽部、大阪光影倶楽部、光風会の大団体で出場者五十名参観者八十名の多数⁷¹⁾」

大会で大関賞に輝いた光藝倶楽部の入江芳一は、昭和4年(1929)11月14日の大阪朝日新聞社主宰・第四回国際写真サロンに出品した「薬師寺十二神将」で特選に入賞し、審査員澤村専太郎(京都帝国大学助教授)に激賞された経験をもつ実力者である⁷²⁾。入江芳一は、以後も各

種懸賞写真競技大会で米谷紅浪、福森白洋、安井仲治ら錚々たる審査員の高い評価を受け、競技大会の常連入賞者となる⁷³⁾。

この史料(図5)によって、従来は設立「月日」までは詳らかでなかった光藝倶楽部の結成年月が、少なくとも昭和11年3月前半までに絞られたことは特筆に値しよう。

光藝倶楽部結成直後の月例会の様子は不明だが、会員数が既に30名弱へ増加していた時期、昭和13年10月21日の月例会は、以下の模様で

図6 光藝倶楽部 月例会記事



『大阪写真新聞』昭和13年12月1日号

あった(図6)。

「十月二十一日鰻谷光藝社にて開催，出席十四名，出品五十五点，入江泰吉氏進行係の下に研究員齋藤，越知，吉田，植松四氏の批評，審査員入江芳一氏の講評あり 第一部(玉寺方面撮影会) 一席コスモス 井那鯛車 二席 深秋 井那鯛車 三席 秋櫻 佐久間正 審査一席 秋櫻 佐久間正 二席 深秋 井那鯛車 三席 コスモス 吉田美芳 第二部(課題「朝」) 一席 越知正五 審査一席 吉田美芳 第三部(自由作品) 一席 工場所見 越知正五 二席 転想 入江泰吉 三席 島の秋 齋藤幸雄 四席 渡切所見 入江泰吉 五席 山の秋 齋藤幸雄 審査一席 島の朝 齋藤幸雄 二席 転想 入江泰吉 三席 波切所見A 入江泰吉 四席 島の秋 齋藤幸雄 五席 波切所見B 入江泰吉⁷⁴⁾」

作品が伝来しておらず、精確を期すことはで

きないが、史料上の作品タイトルにみる限り、「工場所見」のように新興写真を髣髴とさせるものも含まれるが、井那鯛車「深秋」，齋藤幸雄「山の秋」，佐久間正「秋櫻」など、概してピクトリアリズム／「芸術写真」の伝統に合うテーマで叙情に満ちた語彙が選ばれている。同史料が初めて明らかにした，光藝倶楽部時代の幻の入江作品「転想」「渡切所見」「波切所見A」「波切所見B」もまた，入江が嗜好する「オーソドックスで情緒豊かな風景写真」であったと推測することは，あながち見当外れではあるまい。

同史料から，光藝倶楽部の月例会が三部構成で，一部は撮影地域を定めた自由主題の競技方式，二部は共通課題の競技方式，三部は自由作品の競技方式であったことがわかる。また競技席次の選定には，会員の互選による席次と審査員による選定席次との，二種類が設けられていた。

ここで，光藝倶楽部の「審査員」が入江芳一であることに留意したい。『自伝』によると，光藝倶楽部の月例会では入江の長兄が講評や技術指導を担当したとされている。長兄の本名は「憲吉」であるが，画家を意識したアマチュア写真作家の慣例として「号」を用いている可能性も排除できない。入江兄弟の父親が「芳一」に通じる「芳治郎」であること，芳一が奈良出身であること，入江泰吉夫人の長兄に関する証言と符合するように⁷⁵⁾，芳一が地元奈良の写真倶楽部の指導も担当していたこと(後述)。これらの傍証を踏まえれば，講評担当の「芳一」と入江との血縁関係が十分に疑われる。今後の調査を俟ちたい。

入江芳一は，光藝倶楽部以外のアマチュア写真倶楽部の審査員を依頼されることもあり，昭和11年4月9日には地元奈良の佐津木写友倶楽部第九回例会に作品選者として招聘されている⁷⁶⁾。入江泰吉もまた光藝倶楽部のみに自足せず，作風を共有する他のアマチュア写真倶楽部にも参加し，研鑽を積んだようである。大阪写壇における「所謂サロン調の作品」の巨頭と目される大阪写真研究会が⁷⁷⁾，心齋橋の心交社で開催した昭和13年11月の例会に入江の名前を見出せる。

「十一月三日心交社四階ホールにて開催、入江泰吉氏の巧みな進行係ぶりに新入会者の紹介研究員六氏の互選及び山崎会長の批評があった〔後略〕⁷⁸⁾」

例会の「進行係」として会の運営を分掌していることから、入江は大阪写真研究会では既に一般会員より格上の主要な同人であったといえる。つまり昭和13年頃までには、「サロニズム」的な写壇の世界で、入江は一定評価を得つつあったのである。

そうした入江評価の裏付けとして、昭和12年6月25日締切の大阪朝日新聞社主催・全関西写真連盟競技大会における入江の実績が挙げられる。応募総数5,022点に及ぶ競技大会で、入江は、「町のユーモア」など複数の課題から、いかにも入江好みの「風に吹かれる」を選んで応募し、審査員大江素天、安井仲治、中山岩太らの好評を博し、準特選8名の栄冠に輝いたのであった⁷⁹⁾。

以上の光藝俱樂部における表現活動を顧慮すれば、昭和9年の映画制作断念から、昭和14年(1939)の代表作「文楽」との邂逅に至るまでは入江の「失意の時期」である⁸⁰⁾、という従来の評価は、あながちそうとばかりはいいいきれないのである。入江泰吉や入江芳一の活躍を通じて、大阪写壇の伝統的な「サロニズム」の世界で、光藝俱樂部は結成後わずか数年のあいだに名をあげていった。アジア・太平洋戦争が光藝俱樂部の表現活動を窒息させる、わずか数年の光芒である。

遠からず、写真材料商・光藝社にも永訣の日訪れた。「いま大阪が空襲を受けている」――その晩、勤務地の江田島海軍兵学校へ向かう直木孝次郎海軍中尉が神戸で受けた一報は⁸¹⁾、昭和20年3月14日夜半、鰻谷仲之町15番地、光藝社の終焉を意味していたのである。

尾 語

UCRC蒐集の「上田写真機店関係文書」と筆者蒐集の新発見史資料に基づき、戦前期の入江泰吉に関する新事実の紹介と若干の解釈に主眼を置きながら、『自伝』に準拠してきた従来の「定説」の誤謬を指摘する一方、その内容を敷衍・校訂してきた。戦前期の入江泰吉の紀伝的な重要事項に即して整理すれば、およそ以下の「史実」やことがらである。

第一は、上田写真機店時代に関する『自伝』記事の信憑性をめぐる諸史実である。『自伝』には、上田写真機店時代について、入江自身の人事異動年月など不正確な記事が散見され、入江関係書の誤謬の温床となったことが判明した。他方で「上田貞治郎日記」から、昭和5年6月段階には、入江が店主貞治郎の眼鏡に適う有望店員に成長しつつあったことが確認された。

第二は、光藝社創業と写真材料商としての活動をめぐる諸史実である。まず重要なのは、従来、昭和6年創業としかわからなかった光藝社の「開業月」が、上田写真機店で力量が認められ始めた時期を経た、昭和6年4月以前であったことが判明したことである。

また、組合／小売商同盟への加入状況に鑑み、光藝社は創業当初には「正規」の写真材料商とは云い難く、組合傘下の写真材料商としての出立は、映画制作に蹉跎し同盟に加入した「昭和9年3月以降」のことであった。だが入江は同盟／組合の活動に熱心ではなく、方面区委員以外には目立つ活動をみせなかった。もっともその理由には、入江が写真材料商として新参に過ぎなかったことも影響していよう。組合定則からの逸脱は別として、入江は組合執行部に盲従することはなく、組合が日中戦争の気運を煽りたてた折にも、入江はそれに附和雷同する素振をみせなかった。今後、入江の戦争協力を論評する際には、以上の側面にも留意を要する。

第三は、アマチュア写真俱樂部・光藝俱樂部をめぐる諸史実である。まず従来は、昭和11年としかわからなかった光藝俱樂部の「結成月」が、昭和11年3月以前であることが判明した。

光藝倶楽部の月例会の内容や、主要メンバーとその作品の一端も明らかとなったが、最大の収穫は、「文楽」シリーズを除き、その存在が絶望視されていた戦前期の入江泰吉作品のタイトルの一端が日の目をみたことである。それらには、入江好みのピクチャレスクな「芸術写真」と親和性をもつ風景写真に相応しい、主観的で場所が特定されるわけでもない、謂わば心象風景的な語彙が選定されていた。

また入江は、作風を共有する他の写真研究会にも参加しており、昭和13年頃には大阪写壇のサロニズム的な世界では、一定評価を得る「写真作家」となっていたと考えられる。

もとより、以上の「新史実」は断片的なものである。とはいえ、それらを通じて戦前期が手薄であった「入江泰吉年譜」を更新する若干の手掛かりが提供できたと思う。だが本稿も露呈しているように、戦前期入江泰吉研究は、なお史資料不足が否めない。UCRCが蒐集した各種「上田貞治郎アルバム」の集合写真の検証、史資料を欠く昭和12年7月以後の組合活動の実態、光藝倶楽部員入江芳一との関係、光藝倶楽部メンバーに関する史資料調査、戦前期の入江／光藝社を知る基本史資料となる『大阪寫真材料商報』や『大阪寫真新聞』の蒐集など、残された課題は多い。

注

1. 米谷紅浪「故人の藝術」『蕪湖遺作集』浪華写真倶楽部、1920年。
2. 直木孝次郎『法隆寺の里』旺文社、1984年、168頁。
3. 吉川速男『カメラの旅・奈良』玄光社、1940年、北尾鎌之助『聖蹟大和』創元社、1940年。
4. 入江泰吉『入江泰吉自伝「大和路」に魅せられて』佼成出版社、1993年、15頁（以下、『自伝』と略記）。
5. 前掲『自伝』。同書は、1984年刊行の『大和しうるわし』（佼成出版社）を増補校訂し、略年譜を加えたものである。
6. 近年の代表的な論稿に、飯沢耕太郎『偉大なる凡庸』を貫いて」入江泰吉他著『入江泰吉の奈良』（新潮社、1992年）、同「永遠なる心象風景」『入江泰吉 日本の写真家10』（岩波書店、1997年）、石井亜矢子「入江泰吉 大和路の風となる日」同上書所収。
7. 「入江泰吉年譜」『別冊太陽 生誕一〇〇年記念 入江泰吉のすべて 大和路と魅惑の仏像』平凡社、2005年、172頁。
8. 入江光枝「夫・入江泰吉のこと」入江泰吉他著『入江泰吉の奈良』新潮社、1997年、109頁、前掲『自伝』、106頁。
9. 奈良市写真美術館の説田晃大氏の御教示による。
10. すでにデジタル・アーカイブス化作業を完了した古写真／アルバムについては、UCRCのホームページから (<http://ucrc.lit.osaka-cu.ac.jp>) 閲覧できる。第一次デジタル化事業でデータベース化が見送られた史資料については、以後段階的なデジタル化作業も予定されている。
11. 上田貞治郎がアルバムに編制した風景古写真群の大多数は、貞治郎撮影のものではない。風景古写真アルバムの白眉である、「明治初年」の全国名所旧蹟古写真は、大阪府下新町遊廓入口の写真師和田猶松の撮影になる湿版写真が原板である。

「新町橋東詰の和田猶松氏は明治初年暗室を担き回りて初め京阪神より東海道を巡行し東京に至り更に日光や各地の名所旧蹟を撮影して写真を作り大に発売せられ、画はがきあらざる時代とて盛んに歓迎された。原板は勿論コロジオンの湿版写真で後年上田氏が之を譲り受けて保存せられて居る」（上田貞治郎「寫真及業界史 上田貞治郎遺稿」1931年以降成立、15頁、上田写真機店関係文書）。

12. 「光藝社 入江泰吉氏」肖像写真、1931年4月以降、「上田貞治郎アルバム 昭和六年四月ヨリ八年五月まで 第五集」、上田写真機店関係文書。なお同肖像写真が「新発見」

- であることは、奈良市写真美術館の説田晃大氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。
13. 「上田貞治郎日記」1927年6月5日, 12日, 14日, 8月25日, 1928年7月6日, 1930年2月20日等, 上田写真機店関係文書。
 14. 前掲「写真及業界史 上田貞治郎遺稿」。
 15. 「大阪写真材料商報」綴, 1934年1月-1932年11月号綴, 表紙見返し, 小川直人蔵。
 16. 米谷紅浪「写壇今昔物語 三十三」『写真月報』44巻7号, 1939年, 33-34頁。
 17. 『大阪写真新聞』, 1933年5月1日号, 大阪写真新聞社, 添野勉氏蔵。同紙の利用について畏友添野勉氏の御厚意を賜った。記して謝意を表したい。
 18. 前掲『自伝』, 43-44頁。
 19. ピクトリアリズムの多面性については, 金子隆一「日本ピクトリアリズム写真とその周辺 仮構された近代」(金子隆一他編『日本近代写真の成立』青弓社, 1987年), 藤村里美『「創造」モダンエイジの開幕 写真の歴史入門 第2部』(新潮社, 2005年, 38-53頁)。
 20. 入江泰吉「大和路, 運命の出会い」, 前掲『入江泰吉の奈良』, 11頁。
 21. 「入江泰吉略年譜」, 前掲『入江泰吉の奈良』, 118頁, 石井亜矢子編「入江泰吉略年譜」, 前掲『入江泰吉 日本の写真家10』, 68頁, 前掲「入江泰吉年譜」, 『別冊太陽 生誕一〇〇年記念 入江泰吉のすべて 大和路と魅惑の仏像』。
 22. 「上田貞治郎日記」1908年2月3日, 「商業概則」上田貞治郎編『写真?!』上田写真機店, 1908年, 上田貞治郎「写真及業界史 上田貞治郎遺稿」, 67頁, 稲垣虎之助『旧主の半生』私家版, 1922年, 6-7頁。
 23. 入江泰吉「自伝抄(二)写真家志願」, 前掲『別冊太陽 生誕一〇〇年記念 入江泰吉のすべて 大和路と魅惑の仏像』, 31頁。
 24. 「上田貞治郎日記」1926年8月1日。
 25. 前掲『自伝』, 49-50頁。
 26. 「上田貞治郎日記」1927年, 1928年。
 27. 前掲『自伝』, 50頁。
 28. 「上田貞治郎日記」1926年1月14日, 2月3日, 2月20日等。
 29. 前掲『自伝』, 51頁。
 30. 「上田貞治郎日記」1928年1月2日。
 31. 前掲石井編「入江泰吉 略年譜」, 前掲『入江泰吉 日本の写真家10』, 68頁。
 32. 前掲稲垣『旧主の半生』, 6-7頁。
 33. 前掲「写真及業界史 上田貞治郎遺稿」, 67頁。
 34. 「上田貞治郎日記」1926年9月1日。
 35. 泉耿子「入江泰吉氏と写真 聞き書き」『大阪春秋 特集大阪写真小史』51号, 1987年11月, 60頁。
 36. 前掲『自伝』, 52-53頁。
 37. 前掲『自伝』, 52-53頁。
 38. 「上田貞治郎日記」1926年3月3日, 6月14日, 12月3日, 1928年3月2日, 3月4日, 7月7日, 8月16日, 1930年2月4日等。
 39. 『大阪写真材料商報』1930年6月1日号, 14-15頁, 小川直人蔵, 前掲「写真及業界史上田貞治郎遺稿」, 130頁。
 40. 「上田貞治郎日記」1930年6月1日。
 41. 前掲『自伝』, 54-55頁。前掲「入江泰吉氏と写真 聞き書き」, 60頁。
 42. 「上田貞治郎日記」1926年3月23日, 1928年4月10日, 1930年4月22日, 前掲「写真及業界史 上田貞治郎遺稿」, 133頁。
 43. 「上田貞治郎日記」1926年10月24日, 1928年8月12日, 1930年7月13日。
 44. 入江の翌年に入店した松尾國蔵の場合, 店主貞治郎は, 入店時に「二年間出精セバ相当ノ方針ニテ開店セシム」と, 独立時の支援を約束している(「上田貞治郎日記」1926年2月15日)。しかし, 入江の回顧談には, 入江の独立時における上田写真機店の支援について一切言及がなく, 上田写真機店辞職から光藝社独立開業までのプロセスに一抹の不自然さが残る。
 45. 上田銀蔵葬儀写真, 裏書, 前掲「上田貞治郎アルバム 昭和六年四月ヨリ八年五月まで第五集」。
 46. 光藝社写真, 1931年, 前掲『自伝』, 56頁。
 47. 『大阪写真材料商組合規約 附大阪写真材料商組合内規』大阪写真材料商組合, 刊行年不詳, 小川直人蔵。

48. 前掲『自伝』, 55頁。
49. 前掲『自伝』, 73頁。
50. 「組合通報」『大阪寫真材料商報』1934年4月号, 6頁。
51. 入江光枝「回想 入江泰吉と歩んで」『入江泰吉写真集 回想の大和路』集英社, 1994年, 202頁。
52. 「盗難通知 大阪之部」『大阪寫真材料商報』1934年8月号, 12頁。
53. 杉本尚三郎「組合五十年の歴史を語る」『大阪写真材料商組合50周年記念史』大阪写真材料商組合, 1960年。
54. 『大阪寫真材料商報』1935年1月号, 2-3頁。
55. 『大阪寫真材料商報』1935年12月号, 6-9頁, 1936年1月号, 2頁。
56. 「組合議事録」『大阪寫真材料商報』1935年3月号, 3-5頁。
57. 「組合議事録」『大阪寫真材料商報』1935年8月号, 4頁。
58. 「十一年度方面区分割表」『大阪寫真材料商報』1936年1月号, 10頁。
59. 芦屋市立美術館編『ハナヤ勘兵衛展』芦屋市立美術館, 1995年, 136頁。前掲上田銀藏葬儀写真。
60. 喜寿祝宴来臨芳名控, 「上田貞治郎日記」1936年巻末。
61. 内川芳美『マス・メディア法政策史研究』有斐閣, 1989年, 199-203頁。
62. 前掲『自伝』, 89頁。
63. 『大阪寫真材料商報』1937年8月号, 2-3頁。
64. 飯沢耕太郎『「芸術写真」とその時代』筑摩書房, 1987年, 17-23頁。
65. 飯沢耕太郎『都市の視線 日本の写真1920-30年代』創元社, 1989年, 9-15頁。
66. 前掲「入江泰吉氏と写真 聞き書き」, 60頁。
67. 前掲『自伝』, 52-53頁。
68. 若宮武二「大阪写壇 戦中・戦後」前掲『大阪春秋 特集大阪写真界小史』, 55頁。
69. 三浦篤「印象派再考」, 三浦篤監修『印象派とその時代 モネからセザンヌへ』美術出版社, 2003年, ジョン・リオルド〔三浦篤他訳〕『印象派の歴史』角川学芸出版, 2004年, 19頁。
70. 「サロニズム」とは, 西洋美術史が示唆す

るように, 前衛を自負する新興ジャンルが自身の正統性を確保するべく, 伝統的権威によって制度化されている斯界の「旧態」に対してラベリングする, 侮蔑の勾配をもつ, 「承認をめぐる政治」のための語彙である。それにも拘らず, 後年の入江がそのラベリングを引受け, 自身の作品世界の説明をした理由は, 定かではない。

日本写真史における「前衛派」による「単なる趣味愛好家程度のアマチュア」に対する侮蔑を伴う線引きの用例としては, 坂田稔「初歩者のための前衛写真の通俗的解説」(『アサヒカメラ』1938年9月号)を参照のこと。

71. 「写壇消息」『大阪寫真新聞』1936年5月1日, 9頁。
72. 米谷紅浪「写壇今昔物語 二十八」『写真月報』44巻2号, 1939年2月, 60-62頁。
73. 『大阪寫真材料商報』1930年7月号, 20-21頁, 1934年7月号, 2-4頁, 米谷紅浪「写壇今昔物語 三十」『写真月報』44巻4号, 1939年4月, 64-65頁。
74. 「写壇消息」『大阪寫真新聞』1938年12月1日号, 10頁。
75. 前掲入江光枝「回想 入江泰吉と歩んで」, 203頁。
76. 「写壇消息」『大阪寫真新聞』1936年5月1日号, 10頁。
77. 片山泰正「関西写壇拾ひある記」, 佐々木豊明編『大阪写真百年史』大阪府写真師協会, 1972年, 116頁。
78. 「写壇消息」『大阪寫真新聞』1938年12月1日号, 11頁。
79. 米谷紅浪「写壇今昔物語 三十七」『写真月報』45巻1号, 1940年1月, 56-57頁。
80. 説田晃大「映画を撮る」, 前掲『別冊太陽 生誕一〇〇年記念 入江泰吉のすべて 大和路と魅惑の仏像』, 34頁。
81. 直木孝次郎『秋篠川のほとりから』塙書房, 1995年, 117, 123頁。

付 記

本稿の作成と投稿に際して, 上田貞治郎御令孫

上田順一御夫妻，大阪市立大学大学院文学研究科井上徹先生（東洋史），同水内俊雄先生（地理学），同橋爪紳也先生（アジア都市文化学）の諸先生方，大阪市立大学大学院文学研究科21世紀COEデジタル・アーカイブス・プロジェクト関係者各位，奈良市写真美術館の説田晃大氏，畏友添野勉氏にひとかたならぬ御厚意を賜った。記して謝意を表したい。また，本稿脱稿後に刊行された『入江泰吉 大和路巡礼 愛蔵版』（小学館，2005年11月）所収の年譜もまた，本稿が指摘した上田写真機店時代に関する幾つかの誤謬を踏襲していることを指摘しておきたい。

Irie Taikichi and the Age of KOGEISHA in Prewar Osaka-
Japan 1925-1938 :
Focusing on Related Materials of UEDA CAMERA Co.,
and a Few Newly Discovered Historical Sources

Naoto OGAWA

This paper examines the practices of *A Photographer Of Yamatoji*, Irie Taikichi, in pre-WWII Osaka, which have been little known to date. More specifically, the paper explores Irie's practices in the "Ueda Camera Co.," as well as newly discovered historical-materials, one of which was collected by the 21st Century COE Project of the Department of Literature at Osaka City University, and the other by the author. The paper examines three periods of Irie's life: his training at the Ueda Camera Co., the opening of *KOGEISHA* (photographic materials shop); and an amateur photography club called *KOGEI CLUB*.

The paper reveals certain discrepancies between Irie's autobiography and the materials from his training period at the Ueda Camera Co., and that there may have been inaccuracies in previous works. These materials have also revealed new details about his work conditions at the time. They have shed light on the relationship between his film production and his joining the union of the Osaka photography materials shops, which allows us understand for the first time his role as a "photography materials dealer." The paper explores the situation of the monthly meetings at the *KOGEI CLUB* as well as the rather pictorialistic titles of Irie's earlier works (which had been lost during the war). This paper further demonstrates the ways in which Irie participated in other clubs that shared forms of his expression and suggests that his work was recognized in certain photographers' circles. The paper also points to not only the years (which had been known before) but the specific months in which *KOGEISHA* and *KOGEI CLUB* were established.

Keywords : Ueda Camera Co., Irie Taikichi, *KOGEISHA*, *KOGEI CLUB*, Union of the Osaka photography materials shops